

第 30 号の刊行にあたって

学園長 島崎 弘幸

鯉淵学園 教育研究報告第 30 号という節目の刊行に学園長として巻頭言の書けることを光栄に思います。本学に赴任して、まだ 10 か月しか過ぎていないのですが、先生方の熱い思いを酌んで、しばらく休刊していた本誌を再び世に問うことに致しました。

本学の創立は昭和 20 年 (1945) ですが、学校のルーツは、第二次世界大戦前の満蒙開拓民の農業指導者を育成する公的教育機関にまで遡ります。学校の歴史は古く、今も学校の周囲には広大な、農地、果樹園、グラウンド、森に囲まれた学生寮などが受け継がれています。ただ、70 年を超える古い学校であるだけに、ともすれば古い習慣や伝統を引きずることもあります。私どもは、現在、新しい学校づくり、時代の最先端を目指す農業と栄養の教育システム作りや、研究活動を推進しています。本誌もその一環として、新しい視点で取り組むものです。教員の日頃の献身的な教育活動、研究活動、研鑽なくして、このような学術雑誌を刊行できるはずはありません。このことも学園長として誇りに思うことの一つです。

第 30 号は、4 編の論文が編集委員会の査読を経て掲載されています。その一遍一編の論文を学園長として自信をもって、皆様の下に送り出すことができます。

児島論文は、会社経営では当然のように行われる原価計算が、農業経営では一般に行われていない、その原因と難しさについて教育活動を通して学生と共に挑戦した結果をまとめたものです。計画的な農業経営に農業原価計算は必要ですが、季節や天候による労働時間の変化、収穫量の変化、あるいは肥料、農薬、農耕機器など、現場での臨機応変な対応による農業原価計算の難しさについて、種まきから収穫まで、すべての過程を記録し体験してまとめた論文です。

長谷川 (陽) 論文は、栄養学の視点から高齢者の増加で社会的問題となっているサルコペニアの簡易的な診断について、本学の学園祭に参加した近隣住

民の皆様を対象として測定した結果をまとめています。特定健康診断を受ける年齢である 40 歳以上 76 名を対象に調査したとき、正常と診断されたのは全体の 84% であり、サルコペニアは 2.6% (2 名) でした。有病率や職業別、特に 65 歳以上では、日頃の生活習慣、日常的な農作業の有無など、まだ調査すべき課題は多いのですが、簡易的なサルコペニアの診断方法として利用可能であり、今後の継続的な調査・研究が期待できる論文です。

KOBAYASHI 論文は、ヌメリスギタケモドキ (*Pholiota aurevella*) から抽出したマンガンペルオキシダーゼ (過酸化水素を水に変換する酵素) の酵素特性を調べたものです。その特徴として、キノコに含まれる酵素としては、自然界の気温よりも高い温度 (45℃) で活性を持つことや、塩濃度の高い条件下でも高い酵素活性を維持することなど、興味深い性質を見出しました。将来的にはこの酵素を用いて、海水中の環境汚染物質の酵素分解等にも役立つかも知れません。著者は国際学術誌にも多くの論文を発表しており、その実力の下に、分かりやすく、読みやすい英語論文にまとめています。

長谷川 (量) 論文は、1990 年ころをピークに、我が国での魚介類の漁獲高が急激に減少し、日本人一人当たりの消費量も低下している現実を受け、著者は国民一人当たりに必要なたんぱく質の摂取量を確保するためには、減少する魚介類に代えて、鶏肉が利用できるという仮説の下、その可能性を調査しました。魚介類の摂取量は高齢者で多いのですが、若年層では逆に鶏肉が好まれる傾向が分かりました。鶏肉を好む若年層の増加や、社会構造の変化に伴い、今後、我が国では鶏肉の利用が多くなるものと指摘する興味深い論文です。

謝 辞

当該論文集の発行費用の一部はイセ食品株の本校への寄付による。付記して感謝する。各論文には公表すべき利益相反はない。